



館林城下町だより

2019 9月 創刊2号

特集：日光脇往還(台宿町、足利町、谷越町)



館林城の
再建をめざす会

“よみがえる館林城下町”

次号予告

次号(3号)の特集

鷹匠町・大名小路

城下町館林の趣を今に伝える街並み。(2020年3月発行予定)

昭和26年鷹匠町で生まれ育った私ならではの私の鷹匠町の町情報をご紹介。乞うご期待!

城下町館林が発展した要因として交通インフラが果たした役割が大きい。

鉄道の無い時代の交通インフラは街道の整備と水運。とともに榎原康政の偉業が光る。

館林道の整備と渡良瀬川・利根川の治水事業だ。今回の特集は道のインフラ「日光脇往還」。

館林の歴史を調べると、改めて榎原康政の偉大さに気づかされる。館林市は榎原康政への感謝の念が少ないと感じているがどうだろうか?

令和元年9月 館林城の再建をめざす会 田中茂雄

配布料 100円

創刊号が予想以上の人気のため、3週間で配布分が無くなりました。「館林城下町だより」は印刷費を含め全て自費で発行しています。増刷はありません。
数に限りがあり、申し訳ありませんが一人一冊でお願いします。今回、配布手数料として1冊100円いただきます。(好意に応えたく、配布先への謝礼といたします)

「館林城下町だより」

～創刊2号～Vol.2

日光脇往還特集

編集：館林城の再建をめざす会

発行日：2019年9月26日

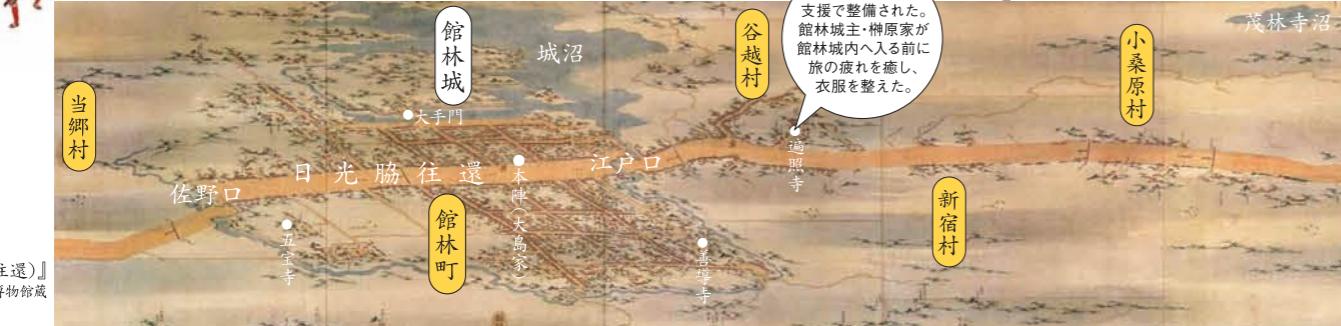
発行者：田中茂雄

発行：昇文館

(祖父・田中健介が神田表猿楽町にて明治44年創業)
〒374-0037 館林市小桑原町855-1 優風館

日光脇往還

館林城下町だより
創刊2号特集



城下町のメインストリート日光脇往還。
江戸時代そのままの道幅が貴重！

元和3年(1617)、徳川家康の御遺骸を日光へ改葬。
榎原康政が整備した街道を家康の靈柩が通過した。
その後、徳川御三家をはじめ多くの大名家が
日光参拝に利用した由緒ある街道が日光脇往還だ。
館林城下町を南は江戸口から北は佐野口まで
縦断する。道幅は8間、今もメインストリートだ。
なんと江戸時代から現在まで変わらぬ道幅という！！
幸運なことに町の整備が進まなかった館林は
江戸時代の城下町がそのまま残る貴重な町となった。
手をかけないことが、開発が進まなかったことが、
歴史ある町として魅力(観光資源)を増している事実！

ところが残念なことに、街道が拡張されるという。
拡張される前に町の記録を残したいと考えた。
なので、今号の特集は「日光脇往還」。



[日光脇往還]

日光脇往還のルートは押島宿(昭島市)から中仙道・吹上宿へ。
忍宿(行田市)を抜け、関所のある上新郷(羽生市)で利根川へ。
川俣の渡しを越え館林へ。館林から天明宿(佐野市)へ至る街道。
天明宿から例幣使街道へ合流し、壬生街道、日光街道を経て
日光東照宮へと至る街道。

別名「日光裏街道」「日光道」などと呼ばれていたが、日光街道と
区別するために、千人同心街道、館林道とも呼ばれていた。

*元和3年(1617)3月27日、徳川家康の靈板が館林城下を通過した。

を迎えた館林藩主は榎原忠次(1605~1665、康政の孫)。

*脇往還とは、徳川幕府が整備した五街道以外の主要な街道。

幕府直轄で道中奉行の管轄。諸藩の経済や文化の発展に寄与。

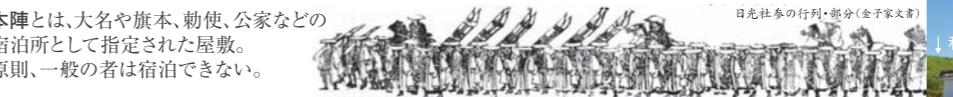
*五街道は、江戸を起点に東海道、甲州街道、中山道、日光街道、
奥州街道。慶長6年(1601)に徳川家康が整備を始めた。

[街道なので宿場があり本陣があった]

利根川の渡しには関所(羽生側)が設けられていたので、
川俣宿は重要な宿であった。本陣(塩谷家)と脇本陣が揃っていた。
館林は本陣のみで大辻の近く足利町にあった大島家。

*本陣とは、大名や旗本、勅使、公家などの
宿泊所として指定された屋敷。

原則、一般の者は宿泊できない。



城下町の歴史

永禄5年(1562)上杉謙信の攻略により赤井氏が追放され足利城主の長尾顕長が館林城に入る。顕長は城の拡張を計画(城沼の西側に町を移す)。足利からの移住により足利町が作られる。天正18年(1590)北条氏が滅び、榎原康政が入城。江戸防衛の拠点として本格的な城塞都市をめざす。町割り代官として引き続き小林彦五郎を任命した。文禄4年(1595)わずか2年で周囲を堀割りと土塁で囲った惣構えの城下町を完成させた。

台宿町

[台宿町の由来]

元々は足次(あしつぎ)村の一部。(『館林記』より)
台宿は足次村の小名にして館林の入会地(いりあいち)だった。



北側の低湿地には矢場川(または渡良瀬川)が流れている。台宿の地には湧き水もあり暮らしやすい土地である。高台であり、洪水の心配も無く人家も多く集まつた。ゆえに台宿と称されたと考られる。

[江戸時代: 日光脇往還の戸数]	
綱吉時代 (延宝2年1674年)	幕末 (嘉永元年1848年)
台宿町 98戸	台宿町 90戸
足利町 59戸	足利町 73戸
谷越町 58戸	谷越町 60戸

※館林城下町の戸数は江戸時代を通じてあまり変化がない。



足利町

[足利町の由来]

『館林記』に「---元亀元年(1570)12月より但馬守請取る。御代官として小林彦五郎御出、町屋創立、足利町は彦五郎足利出の人ゆえ、住居の町は夫より足利町と名付け申し候。町人も多分は足利より引っ越し候ものに有之候。---」と記されている。

城下町建設設計画にあたり足利から小林彦五郎を招き、町割りを担当させた。小林は縁故を以て多数の人を足利から呼び寄せた。天正18年(1590)、榎原康政が館林へ入城。すぐに城の拡大整備を推進。小林が作った足利町を生かした拡張となった。

足利町は町の中心である大辻に接する好立地。

谷越町

[谷越町の由来]

元亀元年(1570)、城下町建設にあたり、従来の佐貫町(旧・城下町であった外加法師の辺りにあった町)に在住した町人と隣接の五ヶ村の農民に命じ、市街地に集めた。※五ヶ村とは当郷村・成島村・谷越村・小桑原村・足次村。

谷越町名は字義をみれば、谷(湿地)を越えるの意味。館林城下町は舌状の高台。南の松原一帯も高台でその間を鶴生田川が流れていた。葦が生い茂る低湿地だった。いわゆる、谷地(やち)である。

谷地を越えて往来することから谷越町の地名が生まれた。初代藩主・榎原康政により、谷地を開拓し街道を敷設・整備したことにより賑わいが生まれた。

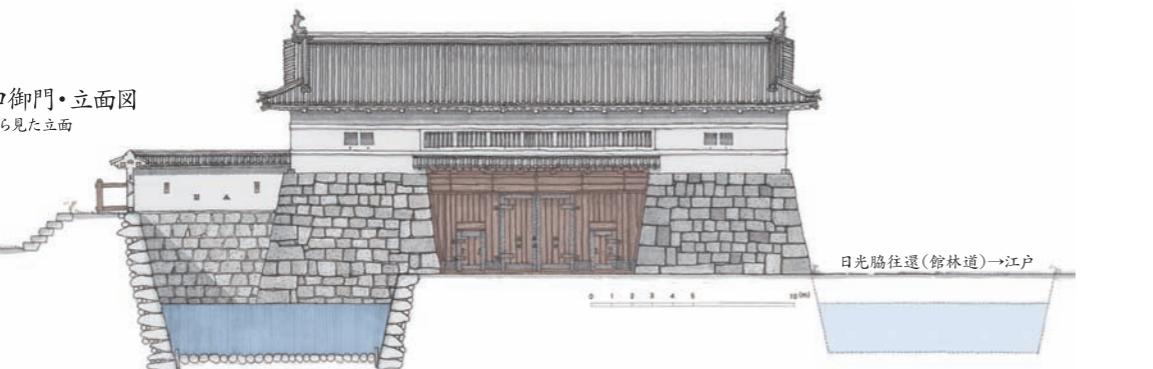
※これは康政が行った治水工事の賜物だ。渡良瀬川堤防は約18km築堤。利根川堤防は約33km。ともに文禄4年(1595)完成。壮大な工事だった。邑楽・館林の発展は康政の功績である。グッジョブ!康政公!ちなみに堤防の幅は約30mで高さ最大6m。素晴らしい。

[日光脇往還の出入口を固める城門研究] (黄金期・徳川綱吉時代)

江戸口御門



江戸口御門・立面図
A方向から見た立面

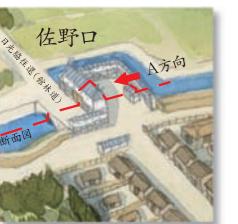


綱吉時代の絵図面に描かれた江戸口御門と佐野口御門をもとに建築家・橋本勇治氏と協働して描いた城門の姿。わかりやすく、きれいにしかも堂々と表現した。構造は江戸城に残る櫓門を参考にしている。

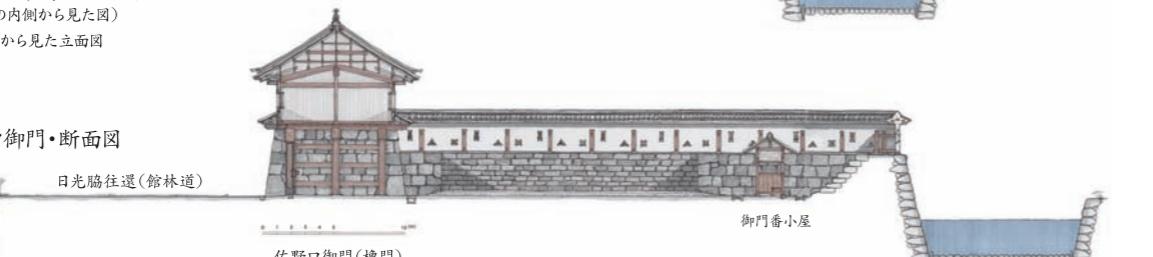
*

多くの大名家が日光参詣で利用した街道。徳川の威光をしめす城下町の門である。

佐野口御門



佐野口御門・立面図
(拝形の内側から見た図)
A方向から見た立面図



佐野口の拝形は大正6年に直線へと改修された。
※江戸口の拝形は明治20年に直線に改修。

イベント・レポート

城下町に残された文化遺産を活用し町の魅力をアップします!

企画:館林城の再建をめざす会

①ミニタウン誌『館林城下町だより』を創刊!

2月14日創刊。発行部数800部。

城下町・旧町名を使用しなくなつてから半世紀。歴史ある町名は町の履歴書だ。(町の成り立ちがわかる。)

城下町館林の歴史を伝える町名を積

極的に使って行こうと始めた企画。新聞(読売、上毛)の記事が素晴らしい、配布した創刊号は僅か3週間で無くなってしまった。(田中)

2019年(平成31)3月5日(火曜日) 言堂

館林の旧町名を紹介したタウン誌の創刊号。江戸時代の館図を使って旧町名を解説している。

読売新聞記事
2019年3月5日

13版 2019年(令和元年)5月9日(木曜日) 言堂

レーモンドの愛した絹織物



世界的建築家

絹織物の「房」を改良した館
Bとして、昭和49歳で「そな
つた織物商人、荒島武彦さん
の作品展開催して、常
きの織物は、世界的美術の
アート・コレクションの「絹
収集」を主導する。世界の
織物で栄光を博す。荒島
で栄光を博す。荒島
で栄光を博す。

職人・荒島さん作品展



読売新聞記事
2019年5月9日

②荒島武彦テキスタイルデザイン展を開催!

2019年4月10日～5月末日
会場: カフェKOUBA(塙場町)
0276-72-6289

期間中カフェKOUBAの売上増に貢献できた。



←「作品集」
カフェKOUBA
で好評販売中!
A5サイズ 32P
定価:300円
ぜひお求め下さい。



県内の織物愛好家が多数見学に来てくれました。

タウン誌市出身デザイナーが発行

館林織物文化の素晴らしさを
ご紹介!